

機関番号：126011
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20320071
 研究課題名（和文） 論述プロセスの分析・可視化に基づくアカデミック・ライティング指導法の開発
 研究課題名（英文） Development of teaching methods of academic writing based on analysis of processes of academic arguing and its visualization
 研究代表者
 二通 信子（NITSU NOBUKO）
 東京大学・国際本部日本語教育センター・教授
 研究者番号：20254691

研究成果の概要（和文）：学術的な論文の論述プロセスを、研究行動の表現としての論文の構成要素の出現状況に着目して分野横断的に分析することによって、分野を超えた論文のタイプの類型化を行った。同時に、論文の各構成要素を形成する表現を抽出した。さらに、レポート・論文の構想段階のプロセスに沿った指導法を提案した。これらの成果をもとに、幅広い分野の学生が、論じる行為への理解を深め、レポート・論文に使われる文型や表現を学ぶための教材（『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』）を開発した。

研究成果の概要（英文）：We made a cross-disciplinary analysis of how arguing process goes on in academic articles with a focus on the appearances of moves as the expressions of research actions, and presented a cross-disciplinary classification of the structures of academic articles. Also, we proposed a teaching method to assist students at different stages in designing a report or a paper. Based on the results of these efforts, we compiled a teaching material titled *A Handbook of Expressions in Reports and Papers for International and Japanese Students* in order to assist a wide range of students in achieving a clear understanding of academic arguing, and learning various patterns and expressions used in academic writings.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2008年度 | 1,800,000 | 540,000 | 2,340,000 |
| 2009年度 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |
| 2010年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 4,600,000 | 1,380,000 | 5,980,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：レポート・論文作成への支援、論文のタイプ、論文の論述構造、論文の構成要素、検証型論文、論証型論文、論文表現

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、特定の専門分野での論文の論理構造に着目した研究が報告されている。これらの研究は、論文の論理構造に着目してその分析を試みたという点で大きな意義を持つものの、アカデミック・ライティング教育への応用という点で、次のような限界を有している。

1) 論文のジャンル分析が、「序論」、「結論」など、論文の中でも比較的パターンが見えやすい部分に限定されており、論文の根幹であり、かつ論文のタイプによって構造に大きな差がある本論についての分析がほとんど行われていない。
 2) 論文・レポートの産出プロセスについて論述構造と有機的に結びつけた分析が

行われていないため、学術的な論文の全体像を縦（プロセス）・横（ジャンル・バリエーション）の双方から俯瞰するという視点に欠ける。

3) 論文・レポートの論述構造と産出プロセスを可視化して提示する手法が不足している。

本研究チームの5名は、長期にわたり大学及び大学院留学生、日本人学生など、主にアカデミックな世界への新規参入者を対象としたライティング教育・研究に取り組み、教材の提案を行うとともに、様々なジャンルの論文の構造分析を通して、文系・理系という括り方が教育上それほど有効なものではなく、なっていることに注目してきた。学際的な研究が求められるようになってきた今日、文系・理系の学生を問わず、異なるジャンル・タイプの論文に接する機会も少なくない。また、学部の基礎教育段階でのレポート、卒論、大学院の修士論文の違いといったバリエーションも視野に入れる必要がある。学部のライティングのクラスでは、様々な専門分野の学生が混在し、学生の大半は学問研究全般について漠然とした理解しかない段階にある。このような学生に対しては、学術的な世界の研究手法を俯瞰的に示した上で、各専門分野の研究特性や論文のタイプを意識的に把握させる必要がある。

以上のことから論文のタイポロジー研究を土台とした、論文の全体像と各タイプ別の論理構造との両方を学習できるような教材の開発、授業活動の提案、また、それらの発信が必要であると考えに至った。

2. 研究の目的

(1) 論文のタイプ別構造及び表現の分析

学術論文やレポートの構造について、従来の理系・文系などの枠組みを超えて、論述構造に着目した分類を行い、1) 各タイプの典型的な論述構造、2) 全タイプに共通する論述構造のコア部分、3) 各部分に特有の表現形式、4) 論文・レポートの典型的な産出プロセスなどを明らかにする。

(2) 論文作成支援教材の開発

上の(1)で得た成果をもとに、論文・レポートの論述構造の特徴、各構成要素を支える文型・表現、論文・レポートの産出プロセスなどを学べる学習支援教材を開発するとともに、そのような教材を用いたアカデミック・ライティングの授業活動の提案を行う。

3. 研究の方法

(1) 理系・文系の幅広い論文やレポートを収集し、分野を超えて論文やレポートに共通して現れる構成要素を抽出し、構成要素の種類やその配列のしかたを調べることで、論

文の構造のタイプを特定した。

(2) 理系・文系の幅広い研究者の助言を得て、各専門分野の代表的な学術雑誌の論文を収集し、タイプ別分類を行う。また、論述プロセスに注目してそれぞれのタイプの論文やレポートの考察及び論述の方法の違いを明らかにした。

(3) 上記(1)(2)で収集した論文から、それぞれの構成要素に伴う文型・表現を抽出し、それらの文型・表現の論文のタイプ別の出現状況を調べた。

(4) 上記(1)(2)(3)で得た成果をもとに、論述プロセスに着目した、留学生や日本人学生を対象とする論文・レポート作成支援のための教材を開発した。また、開発教材を用いた授業の検証を行った。

4. 研究成果

(1) 学術論文のタイプ別分類

複数分野の学術論文における構成要素を抽出し、その出現状況を調べることで、論文のタイプの類型を明らかにした。

人文科学、社会科学、工学の合計180論文について構成要素や構造の分析を行った結果、論文のタイプとして以下の5つの類型が認められた。

1) [実験・調査型]

実験や調査を行って考察するタイプ

2) [理論構築型]

理論を構築し、その理論を検証するタイプ

3) [文献解釈型] 一次資料としての文献を用いて論証を積み上げるタイプ

4) [論説型] 複数の先行研究を比較しつつ論説を行うタイプ

5) [複合型] 上記の1～4のうち2つ以上のタイプが複合しているタイプ

構造型の出現の仕方にはある程度分野による特徴が見られるが、分野を越えて同様の構造型が認められるケースも多いことがわかった。

論文の構造については、これまで論文の特定部分についての限られた分野での調査は行われているものの、本研究のような学術論文全体を視野に入れた調査研究は行われていない。本科研での研究の結果、多分野の学習者を対象に論文読解・論文作成の指導を行う際に把握しておくべき論文構造の類型、その分野ごとの現れ方、および各類型の典型的な構成要素分布のパターンを提示することができた。(雑誌論文③、学会発表②、⑦)

(2) 論文の導入部分の構造の比較

論文の構成要素に直目して、学術論文の導入部分における展開の型の分野横断的な

比較を行った。

人文科学・社会科学・工学各 90 編、計 270 編の日本語原著論文を対象に、その「導入部分」に典型的に出現するとされる構成要素の分析を行った。すなわち、「a) 研究の対象と背景の説明、b) 先行研究の提示・検討、c) 研究目的・研究行動の提示」という構成要素の現れ方を比較し、これらの「導入的要素」の分野間の異同について分析した。その結果、共通点として a→b→c という典型的な展開の型が確認された一方で、分野や雑誌による展開の違いが明らかになった。また、冒頭章以降の章で c が再帰する「課題設定再起型」のパターンが観察された。これらの結果から、学習者への論文読解・作成指導に関して提言を行った。

本研究は「導入部分」のみを対象とした比較研究であるが、論文の構造についての横断的な研究の可能性を示した。今回の手法を用いて、「終結部分」など他の部分の展開の型にも着目した研究を行うことによって、日本語の論文の構造の「可視化」をさらに進めたい。(雑誌論文⑧)

(3) レポート・論文作成指導内容の検証

本科研で開発中のレポート・論文作成支援教材の構想段階の部分を、学部の日本語科目で補助教材として用いて、論証型レポート作成の初心者を対象とした実践を行い検証した。その結果、課題発見・解決能力、論理的思考力・文章表現力・口頭表現力などのアカデミックジャパニーズ能力の養成に一定の効果が認められた。また、大学生の文章表現能力や、協働学習を活用したライティングの指導などの検討も行った。

上に加えて、レポート・論文作成上の課題をテーマに、留学生および日本人学生によるパネルディスカッションを開催し、当事者の立場からの問題提起をもとに、大学でのレポート・論文作成に対する日本語教育からの支援の可能性について検討を行った。(学会発表①、③、雑誌論文⑨、その他①)

(4) レポート・論文作成支援教材の開発

本科研での研究成果をもとに、1) レポート・論文作成のプロセス、2) 論文のタイプによる構造の違い、3) 論文の構成要素に応じたレポート・論文表現、4) レポート・論文の文章や日本語についての知識、などを系統的に学習できる教材の作成に取り組み、学術日本語の新規参加者のための、論文の構造や論述のプロセスに着目したライティング支援教材(『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』)を出版した。

開発した教材は、これまで漠然としか述べられてこなかった<研究手法による論文の構造や論述プロセスの違い>を可視化する

とともに、そのような論述プロセスと結びつけた形でレポート・論文に必要な文型・表現を学習できるようにしたもので、留学生のみならず日本人学生の論文作成にも極めて有効な教材であると考えられる。(雑誌論文①、②、⑥、⑦、図書①)

(5) 開発教材を用いた授業とその検証

(4)で開発した教材を用いた実践を行い、その結果をもとに、授業での活用の可能性を示した。

留学生を含む大学院生を対象とした論文のテーマの絞り込みから研究計画の具体化へと至る「研究ストラテジー」の養成、研究計画書や論文のスキーマの形成、論文の分析的な読みを通じた論文作成能力の養成など、さまざまな段階のクラスでの本教材の活用の可能性が明らかになった。また本教材は、留学生のみならず日本人学生に共通して活用できること、そして論文作成に直面する学部後半や大学院の学生だけではなく、日本語のアカデミック・ライティングの入り口に立ったばかりの新生にも、日本語の文章語の知識や技術を指導する教材として有効であることも確認された。(雑誌論文④、⑤、⑩、学会発表④、⑤、⑥、⑧、)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

① 二通信子、大島弥生、因京子、佐藤勢紀子、山本富美子、論じる行為への理解を進める論文・レポート作成支援表現集の開発、専門日本語教育研究、査読有、Vol.10、2008、53-58

② 大島弥生、二通信子、因京子、山本富美子、大学・大学院の学術コミュニティへの新規参加者に対する日本語表現能力育成の可能性—専門日本語教育分野の蓄積からの支援策を考える、大学教育学会誌、査読有、30 巻 2 号、2008、59-61

③ 大島弥生、社会科学系の事例・史料にもとづく研究論文における論証の談話分析、専門日本語教育研究、査読有、Vol.11、2009、15-22

④ 佐藤勢紀子、サンプル論文で学ぶ論文作成の技法—「研究のための日本語スキル」授業報告—、アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル (Web 版)、査読無、2009、37-47

⑤ 大島弥生、学部留学生に対する論文読解の支援の試み—論文スキーマの育成をめざして—、アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル (Web 版)、査読無、2009、

48-56

- ⑥ 二通信子、論文の引用に関する基礎的調査と引用モデルの試案、アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル (Web 版)、査読無、2009、65-74
- ⑦ 村岡貴子、因京子、仁科喜久子、専門文章作成支援方法の開発に向けて：スキーマ形成を中心に、専門日本語教育研究、査読有、Vol.11、2009、23-44
- ⑧ 大島弥生、佐藤勢紀子、因京子、山本富美子、二通信子、学術論文の導入部分における展開の型の分野横断的比較研究、専門日本語教育研究、査読有、Vol.12、2010、27-34
- ⑨ 大島弥生、大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力育成の指標づくりの試みーライティングのプロセスにおける協働学習の活用へ向けてー京都大学高等教育研究、査読有、Vol.16、2010、25-36
- ⑩ 因京子、実務的・学術的文章のスキーマ獲得を援助する指導ー「正しいことを覚える」から「意味あることを見分ける」へー、査読有、東アジア日本語日本文化研究、11 巻、2010、111-130

[学会発表] (計 11 件)

- ① 山本富美子、レポート・論文作成の構想段階における思考・作業プロセスの可視化の試み、日本語教育学会 2010 年度秋季大会 2008 年 5 月 25 日、首都大学東京
- ② 二通信子、大島弥生、因京子、佐藤勢紀子、山本富美子、アカデミック・ライティング支援のための表現集の開発ー分野を超えた論文の構成要素抽出の試みー第 7 回日本語教育国際研究大会 2008 年 7 月 12 日釜山外国語大学
- ③ 大島弥生、大学生の文章に見る問題点の分類と文章表現能力の指標づくりの試み、大学教育研究フォーラム、2010 年 3 月 19 日、京都大学
- ④ 因京子、実務的・学術的文章のスキーマ形成・活性化を促す文章分析活動の効果、第 11 回東アジア国際言語文化フォーラム、2010 年 3 月 19 日、上海外国語大学
- ⑤ 村岡貴子、因京子、仁科喜久子、専門日本語ライティング能力の獲得を目指す日本語テキスト分析タスクを通じたスキーマ形成、第 8 回日本語教育国際大会、2010 年 7 月 31 日、台湾政治大学
- ⑥ 二通信子、因京子、山本富美子、佐藤勢紀子、大島弥生、表現集型教材を用いた多様な学習者へのアカデミック・ライテ

ィング指導、第 8 回日本語教育国際大会、2010 年 8 月 1 日、台湾政治大学

- ⑦ 佐藤勢紀子、大島弥生、山本富美子、因京子、複数分野の学術論文における構成要素分布のバリエーション、日本語教育学会 2010 年度秋季大会、2010 年 10 月 10 日、神戸大学
- ⑧ 二通信子、論文作成をめざす留学生に対する日本語教育からの支援ー論文の構成要素の可視化、引用についての指導などを中心に、神戸大学コロキウム「アカデミックライティングの手法」、2011 年 1 月 19 日、神戸大学

[図書] (計 5 件)

- ① 二通信子、大島弥生、佐藤勢紀子、因京子、山本富美子、留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック、東京大学出版会、2009、240 頁

[その他] (計 1 件)

- ① 公開研究会報告書
パネルディスカッション・グループディスカッション報告書「レポート・論文を書くうえで何が大変か、どう乗り越えたかー学生の声を聞きともに考えよう」、2011、32 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

二通信子 (NITSU NOBUKO)
東京大学・国際本部日本語教育センター・教授

研究者番号：20254691

(2) 研究分担者

大島 弥生 (OSHIMA YAYOI)
東京海洋大学・海洋科学部・准教授

研究者番号：90293092

佐藤 勢紀子 (SATO SEKIKO)
東北大学・高等教育開発推進センター・教授

研究者番号：20205925

因 京子 (CHINAMI KYOKO)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授

研究者番号：60217239

山本 富美子 (YAMAMOYO FUMIKO)

武蔵野大学・文学部・教授

研究者番号：50283049